

## JFC ネットワークインターンの経緯・内容・成果

### 原めぐみ

大学1年の頃より神奈川県藤沢市の小学校に設立された日本語教室でボランティアをしていた私は、数人のフィリピン人の母親たちと仲良くなりました。そのうちの一人が学校や地域の人、フィリピン人友人にも告げずに子どもと共に失踪したという事件があり、衝撃を受けました。彼女を追い込んだものは何だったのか疑問を抱くようになり、学問・研究としてだけでなく、支援などを通して在日フィリピン人やJFCの問題に関わっている団体に参加することにより深く勉強していきたいと思うようになりました。そして2007年の春、マニラでマリガヤハウスを訪問し、JFCネットワークの活動のお手伝いをしたいと思いました。2007年の夏休みは1ヶ月間東京事務所で微力ながらもインターンシップをさせてもらい、また高校受験を間近にしたJFCの女の子の家庭教師としても東京に通いました。8月の末にはスタディーツアーに参加させていただき、在比JFCの歌っている時の嬉しそうな笑顔や、自分の境遇を話す時の複雑そうな顔を見ることができ、明るい性格の裏には深刻な問題を隠しているという「フィリピン人の二枚扉」を垣間見たのでした。

また、東京事務所での1ヶ月弱における事前研修を経て、2008年10月～12月の間マリガヤハウスにインターンとして受け入れてもらいました。研修中は翻訳などのデスクワークに加え、クリスマス会のための寄付金集めや、ソーシャルワーカーについてJFC宅へ家庭訪問に行ったり、12月10日には在比日本大使館にて国籍取得集団申請にも立ち合わせてもらったり、毎日自分の足でマニラを歩き回りながら活動させていただきました。

この3ヶ月のフィリピンでの経験を軸として卒業論文では在比のJFCに焦点を絞り、執筆しました。文献調査、定量分析、そしてインタビュー調査などのフィールドワーク手法を用い、在比のJFCがJFCであるが故に生じている問題は何であるのか、その原因とは、そして解決方法の糸口とは、という問題発見・問題解決のプロセスを記述したのです。特に高校生・大学生の在比のJFCが抱える問題としてここでは日本での就労について特記したいと思います。JFCの中には、失業率の高いフィリピンで将来に不安を抱える者も多くいます。JFCのほとんどが日本に行きたいと言いますが、年齢が上がるにつれ「父に会いたい」という素朴な理由から「日本で働きたい」という願望を理由にする者が増えています。自分達の権利である日本国籍取得、日本の市民権の獲得は他のフィリピン人は持っていないチャンスだと考えるJFCはたくさんいます。しかしその機会を正確に使わないと新たな問題が浮上してくると思うのです。既に、何名かの日本国籍を持つJFC(必ずしもマリガヤハウスのクライアントではありません)が、仲介業者の斡旋で日本に渡り働いています。女で一つで育ててくれた母をサポートするために誰にも告げず大学を中退して日本に渡った者もいます。残念なことに彼らからは日本における劣悪な就労環境がしばしば報告されます。彼らが搾取の対象にならないような制度作りはますます急務であると思います。一方、私としてはインターンとは言え、JFCの国籍取得などのお手伝いをするにより彼らの人生を大きく変える可能性があることを自覚して、責任ある行動をする必要があると痛感しました。

最後に、東京・マニラ両事務局の皆様には大変ご迷惑をかけたことにお詫び申し上げますと同時に、私の数々のわがままを聞きいれくださり、日比両所でたくさんの経験をさせていただけたことに、心より感謝いたします。今後とも宜しく願いいたします。

